

## 私の被爆体験記

脇神 昭悦 (当時18歳)  
札幌市



当時18歳の私は陸軍船舶司令部参謀部飛行班に所属し軍務についていました。1945年8月8日、私たち乗員3名と参謀少佐1名は双発輸送機に搭乗し、出張先から広島市上空へ戻りました。広島が8月6日に新型爆弾による攻撃を受けたことは知っていました。

広島市はそれまで一度も米軍の空襲を受けたことのない街でした。出発前の綺麗な街並は一面の焼け野原に変わり、街の中心部の相生橋付近は完全に破壊され、燃え残りの煙がただよっていました。低空でよく見ると川の兩岸には数珠つなぎに死体が延々と浮かんでおり、艇が救援のためか一杯のけが人を乗せて走りまわっています。そのうち機内に煙とともに何とも言えない嫌な臭いが入ってきました。それは原爆で亡くなった人を焼いているあちこちの火葬場から立ち昇る煙の臭いでした。今になって考えると私たちは放射性残留物(核のゴミ)の充満した空を飛びまわりながら被爆していたのです。その時私たちには放射能と言う認識はまったくありませんでした。

基地飛行場に降りて宿舎へ戻る道を歩いていると、格納庫や倉庫、兵舎などの建物から苦痛に呻く人の声が聞こえてきました。大火傷を負いやつとこのことで逃げて来た人たちです。火傷の痛さに苦痛の声をあげ、毛布1枚を敷いて床に転がっているのです。私たちはまともな治療をしてやることはできませんでしたが、「火傷には油を塗るといいと聞いた」という年配の兵士の提案で、倉庫に保管してあった飛行機整備用のヒマシ油を次々に塗ってやりました。歩ける人は治療を受けて帰りましたが、大方はそのまま床に寝て、「水、水を下さい……」「痛いヨー、助けて……」と叫んでいます。助ける術をもたない辛い思いは無念としか言いようがありません。

次々と亡くなる人が出てきました。真夏の暑いさ中ですからそのままにしておくわけにはいきません。私たちは仮りの火葬場をつくって火葬しました。そこへリヤカーに死体を乗せて運ぶのですが、腕や肩をつかむとズルッと皮膚がむけるのです。そういう作業を何日も何日も続けました。

1週間後に戦争は終わりました。気落ちした私たちを襲ったのは初期の放射線障害でした。発熱、下痢、食欲減退、倦怠感などの症状を発症したのです。治療所もなく私たちは宿舎でただ横になっているだけでした。8月下旬になって体調が回復し、9月15日に旭川に帰郷しました。被爆から70年、心筋梗塞など、放射能が原因かどうかわからないものも含めて多くの病気で入院治療を受けて来ました。現在は前立腺ガンで治療中です。

皆さん、70年の間一日たりとも頭を離れることなく、放射能の影響を心配しながら生きると言う事はどういうことかわかりますか。原爆は「悪魔の兵器」です。この世にあってはならないものです。

世界から核兵器を無くしましょう。ふたたび被爆者をつくらないとの願いをこめて、私の体験を記しました。